施設最前線 施設訪問

新・見てある記——5

施設の内容とスタッフの活躍をレポート

有限会社多摩たんぽぽ　介護サービスセンター

たんぽぽ（東京都）

在宅サービスから多様なサービスを展開

取材協力：多摩たんぽぽ 介護サービスセンター　取締役　千葉信子

恵まれた自然環境

多摩たんぽぽ介護サービスセンターは、三鷹市の西部を流れる「野川」のほとりの住宅地に立地している。大岡昇平の小説『武蔵野夫人』の冒頭に武蔵野の崖線（はけ）が描かれているが、「恋ヶ窪」を源流とする「野川」はその「はけ」に沿って流れている。この「野川」に沿った平坦部に、たんぽぽ介護サービスセンターの建物が建っている。見上げれば、小高い丘の上に国立天文台の一部が見える。調布市などに隣接した閑静な住宅地なのである。

たんぽぽの外観

若いときからの在宅療養の夢

介護保険の施行直前に有限会社を設立した千葉信子さんは、岩手県の准看護学校の時代から在宅医療の夢を抱いていた。岩手県で、結婚してから上京して、30年間、三鷹市の精神病院に勤務した。その間に看護専門学校を卒業し、看護師となる。精神科リハビリテーション認定看護師でもある。介護保険の施行が、自立して地域の在宅ケアを手掛ける絶好の機会になった。

それには会社員の夫をはじめ、家族の理解のもとで自分の退職金のほか、家財を投じ、多額のローンも組んで在宅看護からスタートを切った。

施設の概要

住所　〒181－0015
東京都三鷹市大沢１－18－10
電話　0422－34－1011
ファクス　0422－34－1039
設立　平成11年、有限会社を設立
平成17年、事業拡張
事業種類　居宅介護支援、訪問看護、訪問介護、通所介護、ケア対応型共同住宅、福祉用具、介護タクシー、福祉塾

訪問看護は、介護保険だけでなく、医療保険の適用も対象としているが、とくに千葉さんは地域の精神障害や難病の子どもの看護にも力を入れている。

たんぽぽは若葉が食用になり、根は生薬になる多年草である。踏まれても太陽に向かってたくましく生きるたんぽぽが千葉さんは大好きでこの名を使っているとのことである。

介護が必要な高齢者は、単に老化して心身の機能が不自由になっているのではなく、多くの事例はなんらかの病気に侵されているので、まず医療、とくに看護がベーシックなサービスとなったうえで、いろいろな介護の成果が上がるに違いないというのが、千葉さんの構造的発想である。さらに、住み慣れた自宅で、家族の優しい介助があってこそ、幸せな老後になると考えている。

在宅サービスから多様なサービスへの展開

こうした発想のもとで訪問看護からスタートを切り、つづいて訪問介護を手掛けることになった。そして、さらに通所介護にも進出することになった。というのは、訪問サービスを経験するなかで、家族の負担などにも気付いたからである。週に何日でも要介護者が自宅を離れ、通所ならではのレクリエーションやリハビリなどのサービスを受け、また家族にも休息や自由時間を提供することができるのである。

そのために、平成16年12月に、「野川」沿いに建坪265㎡の２階建ての建物が新築された。１階は通所介護のフロアとし、２階は「大沢の家たんぽぽ」と名付けられ、ケア対応型共同住宅となっており、有料老人ホームとみてよい。

さらに介護タクシー事業もしている。２種免許を持っている経験豊かなヘルパーが利用者の自宅に迎えに行き、着替えなどの外出の準備もして通院の介助のほか、目的地への送迎を手伝っている。前述の新築の建物の前は662㎡近くのスペースがあり、駐車場としても利用されている。

訪問看護ステーションなどの成果

事業の中心である訪問看護に注目しよう。

上記のとおり利用者は高齢者だけでなく、子供も含まれており、合計180人近くに達している。高齢者の介護度は平均すれば要介護３くらいだが、要介護４～５の高齢者も少なくない。パーキンソン病で動けなく

たんぽぽの玄関

夏祭り

なっていたり、操作の難しい人工呼吸器を使っている高齢者もいる。

そうした高齢者には病院から退院したばかりの高齢者が多く、年々80人くらい受け入れている。それに対し、病院に再入院したり、特養などに移動したり、亡くなったりする利用者は年々50人に達している。したがって、年々30人の利用者が増加してきている。「多摩たんぽぽ訪問看護ステーション」の成果の一端を示しているのだろう。

それに対し、所長をはじめ、正看護師、保健師の常勤9名、非常勤4名、准看護師の常勤1名、理学・作業療法士が非常勤6名の合計20名が訪問看護を担当している。

それにしても訪問看護は年々利用者も増え、成果が上がっているのに反し、訪問介護事業は法改正などの影響で収支バランスを保つことが難しい現実がある。

音楽療法からコンサートへの展開

他方、通所介護は土曜日も祝日も行われており、毎日のように20人前後の要介護者が通ってきており、リハビリのほか、とくに音楽療法が盛んになっている。それというのも千葉さんは小学校のとき、授業前の早朝、音楽の先生からピアノの特別のレッスンを受けていた経験があり、どんな時も音楽によって心が支えられるという思いを持っている。

音楽療法の成果は、通所介護のデイルームに家族などを招いて披露されているが、2006年はプロの音楽家と共にコンサートを開催することになった。会場はなんと三鷹市の芸術文化センターの「風のホール」だった。このホールは620人くらいを収容する中堅のコンサートホールで、アメリカから専門家を招いて音響効果を調整し、注目されているホールなのであるが、当日は450名もの人々が参加した。筆者も参加させてもらった。

第1部は、25名ほどの要介護者を3組に分けて、1組ずつ1人のインストラクターが指揮しながら、いろいろな打楽器や簡単な管楽器が演奏された。よく知られている童謡をはじめ、「上を向いて歩こう」などのポピュラーがピアノの伴奏もまじえて演奏された。当然、女性の演奏者が大半を占めていたが、男性の美声で昔の流行歌も披露された。大変迫力のある演奏だった。

さらに第2部では、プロと音大生のピアノを中心とした弦楽器のクアルテットで、シューベルトなどのクラシックも演奏された。そのため、家族や地域の人々だけでなく、音大などの関係者も客席を埋めていたようだが、親に連れられた小学生なども多かった。訪問看護などを受けている子供や音大生などに教わっている子供も含まれていたのではないだろうか。

このコンサートでは2,000円の入場券が発売され、売り上げの剰余金は三鷹市の社会福祉協議会に寄付されることになっていた。三鷹市長の清原慶子さんの応援の挨拶もあり、このコンサートは社会事業であることが知らされた。

大沢の家たんぽぽの特徴

最後に、前述のケア対応型共同住宅について、その特徴をみておこう。

収容人数は9人であり、個室5室、二人部屋2室のほか、浴室、食堂、休養室（共用）、スタッフルームの施設で、介護職員による24時間ケアが行われている。

生涯入居金として、75歳未満600万円、75歳～85歳未満500万円、85歳以上400万円、月々20万円ほどの利用料となっている。小規模の有料老人ホームで、グループホームにも似たユニット型の住居になっている。

千葉さんの説明によれば、プライバシーを保つと同時に、自宅で使っていた備品なども持ち込んでおり、共同のトイレや浴室へは茶の間のような食堂・休養室を通っていくほうが家庭的ではないか、という考えのようである。

2階から見える「野川」の流れや、それに沿った遊歩道の眺めは、誰しもの心を癒やす落ち着いた景観である。

コンサートの風景

今後の課題

すでに今後の課題について少し指摘したが、何より人件費が7～8割にも達しており、収支のアンバランスは解消しなくてはならない。訪問サービスの動線の短縮などでバランスをとりつつあるが、無医村で父を亡くした思いから、千葉さんの夢は在宅医療を完成することこそ、今後の課題なのだろう。現在も非常に連携がうまく機能しているが、今後は更に医師や薬剤師などの協力も不可欠となるだろう。とくに千葉さんは自分の経歴を生かして、精神科への多様化も課題にしているに違いない。

なお、同社は2007年2月、武蔵野市桜堤に訪問看護・居宅支援・訪問介護の3事業を新たに開始している。